

議事の経過

| 発言者 | 議題・発言内容・決定事項等 |
|--|--|
| <p>司会</p> <p>事務局 (大津)</p> <p>小林委員長</p> | <p>○開会のことば 本日、委員全員が出席のため、委員会成立である。</p> <p>1 調査・検討（進行 委員長）</p> <p>（1）上尾市不登校対策基本方針の検討 ○前回からの加筆・修正点を中心に説明。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前文について ・キャッチフレーズについて ・不登校の未然防止の視点について ・未然防止のための校種間での連携について ・不登校対策コーディネーターについて ・教育委員会の役割について ・別添2について <ul style="list-style-type: none"> ・令和3年度問題行動調査の結果では、埼玉県は長期欠席が多く、不登校が少ない。新型コロナウイルスの感染回避が多かった。感染回避が理由だと医療が要因となる。しかし、感染回避は、人との接触が怖いことなのだから、不登校に近いと言える。 ・教育機会確保法は、不登校児童生徒を対象としている。感染回避は対象ではない。欠席は日数だけでなく、それをどのように分類するかが重要である。感染回避は不登校でカウントし、教育の問題として捉え、教育機会確保法に照らして対応ができるとよい。 ・加筆部分について説明する。 <p><前文部分について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己制御感（自分の思い通りに自由に動けるという感覚）は、今のような災害などを意識して加えた。 <p><3（1）について></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校享受感はいわゆる「楽しさ」である。しかし、「居心地のよさ」は、これよりも欠席の少なさにつながることが報告されている。 ・新型コロナウイルス感染が落ち着いて、先生方は特別活動の充実に力を入れた。児童生徒が、学校を楽しんでいるように。より目指す者は居心地のよさとしたい。 |

| | |
|------|--|
| | <p>< 3 (3) について ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・いじめ、暴力行為等の指導では、その時を振り返り、「今」どのように思うかで内省を促すことが大切である。 <p>< 3 (4) について ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアについては、「できない自分を許せる」基礎的な自尊感情を育むことが大切である。学校では“very good”と目指しがちだが、まずは“good enough”を目指したい。 <p>< 昨今の状況について ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルスが拡大したことで、ASD に関する相談が減ったという。要因は、教育環境の変化である。感染症対策のために、コミュニケーションの機会が減った。子供たち同士の関わりが少なくなったため、表面化しにくくなった。コミュニケーションについては、この3年間分、力が育ってないかもしれないことを考慮する必要がある。 ・小学校で暴力行為が増加しているのは、感情コントロールの未熟さやコロナ禍による抑圧も影響しているかもしれない。ただし、暴力行為は、コロナ前から増加傾向であった。中学生は、暴力行為は減っている。言い換えれば、抑制された状態とも言える。さらに高校では、自殺が増えている。小学校の暴力行為を減らせばよいという単純なものではない。 <p>< 4 (7) について ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校復帰にあたっての受入れ態勢づくりについては、物理的に近づくだけでなく、同じ場所でも感情面での変化を見ていくことが大切である。そのために、本人にその時に気持ちを聞いていくことが必要である。聞くことで自分の気持ちを自覚する子もいる。よい状態を共に喜ぶ、良くないときは寄り添い、心配することが重要である。 |
| 青木委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・「居心地のよい」ことは重要である。本校でも別室にしか来られない子は、そこが居心地がよいからだと思う。「学校」と「学校教育環境」の視点は、学校として個々を見ていく上で必要であると感じた。 |
| 池田委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな方に委員長の話を聞いてもらいたい。話を聞いて「なるほど」と思うことがたくさんあった。先生方に聞いてもらい、実践につなげることが大切だと感じた。 |
| 遠藤委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校の先生方にこの基本方針がどのような経緯で作られているか理解をしてもらうことが重要である。 |
| 波瀾委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・どうして学校に行けないのか、それを表出できない子に対して、学校が推察して対応していくことが大切である。現場の先生方が、基本方針の内容 |

| | |
|---------------|---|
| <p>村田委員</p> | <p>を理解していくことが重要で、次につながるポイントになると思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICTについて、先生方は頑張っている。センターでオンラインを受けた生徒が、学校の別室でオンライン参加し、給食を食べられるようになったケースがある。オンラインの面談も効果的な場合がある。センターでの活動の様子を撮影し、担任に動画を見せることもある。 ・学校と保護者との連携は、書いてあるとおりであるが、実際は難しい。毎日電話をしてくれる先生もいる。毎日、「どうですか」と先生に問われることに、保護者がストレスを感じるなど電話の回数や時間は難しい。 ・卒業後についての言及も大切である。中3の相談ケースでは、所属がなくなるかもしれないという不安は本人や保護者にとって大きかった。どのように引き継いでいくかが大切である。 |
| <p>小林委員長</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が変化する要因は、保護者の変化が大きい。特に、前向きな変化が大きい。保護者が変わることが大切である。 ・担任が保護者に尋ねる際に、漠然と対応を尋ねるのではなく、メニューとして示すと効果があるかもしれない。一番忙しい時を想定し、対応可能なことを提案する。コミュニケーションを図りながら、それぞれにとって適度なものになるように1月毎くらいで調整していくとよい。 |
| <p>石井太委員</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・不登校になった際、保護者が学校に敵対心をもつことがある。サポート体制などの安心材料を提示できるとよい。 ・進学時には、子ども家庭総合支援センターにつなぎたいケースはあるが、実際は業務が多いよようで、難しい状況がある。 |
| <p>石井英委員</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・「good enough」の考えがよい。保護者ももっていることが必要だと感じた。マイナスについての指摘をしがちだが、児童生徒ができたことに目を向け、認めていくことが大切だと感じた。 |
| <p>伊藤副委員長</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・不登校の児童生徒の中には、「家庭訪問で対応しない。」「電話に出ない。」など相談できない家庭が増えてきている。保護者が通院しているケースもあり、教育だけの支援で考えることはできない。先生方は、頑張っている。 ・一言で連携と言っても、色々な家庭がある。距離感を考えていくことは大切である。 ・児童生徒が、診断を受けているケースも増えている。それを前提に学校は対応していく。 ・基本方針の体裁について要望したい。 |

| | |
|-------------|---|
| 小林委員長 | <p>①文字が小さい。せめて12ポイントで記してほしい。</p> <p>②本文と別紙のつながりが、わかりにくいため表記を検討してほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連携については、書かれていることはその通りだけど、実際は難しいことも多い。関係機関を知っていることは、大切。校内で一人でもネットワークをもっている人がいると、つながりがスムーズになる。連携とはいえ、アナログの強さもある。 |
| 小林委員長 | <p>(15分休憩) 14:27～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別添2については、生育歴や家庭状況について、「書かなければならない」となることはトラブルを生む可能性がある、削除する。保護者と確認しながら入れるようにすればよい。 ・不登校対策基本方針については、(案)は本委員会として承認でよいか。 →全委員異論なしのため、承認 |
| 小林委員長 | <p>(2) 不登校児童生徒が学校外の公的機関や民間施設において相談・指導を受けている場合の指導要録上の出欠の取扱いの検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長期欠席にカウントしている子は教育的支援をしなくてよいのか。法的には、不登校の子だけ教育的支援をする必要がある。こぼれてはならないと考えるが、どう捉えていくのか。 ・小金井市の教育メタバース事業について。不登校児童生徒200人のうち50人が興味をもち、30人がメタバースに参加した。 ・小学校低学年が、メタバース参加。2日間、ずっとオンライン空間上で走り回った。次の週から、落ち着いて話ができるようになった。教室で、バーチャルで人が多くいる中で、思い切り走れる(やりたいことができた)からよかったのだと思う。 ・メタバース特例校を東京都に作ってみてはと考えたが、文部科学省は、小中学校については、基本的に対面を想定しており、高校から通信と考えているようである。 ・東京都は、適応指導教室に通っていて都のシートでフィードバックすると、月1万強を補助してもらえる。上尾市ではどのように取り組んでいくのかということも、今後の検討事項に入ってくるかもしれない。 |
| 事務局 (大津) | <ul style="list-style-type: none"> ・民間施設での学習などを広く認めて出席扱いとしていくのか、ある程度施設を限定して認めていくのか。今回の意見をもとに、次回では具体的事例などを踏まえて検討していきたい。 |

| | |
|-------------|---|
| 事務局 (所長) | <ul style="list-style-type: none"> ・視点としては、指導の中身か、施設か、子供の変容か。参考資料等にとらわれずに意見をいただきたい。 |
| 伊藤副委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・フリースクールも様々である。学校としては、場所、オンライン、時間帯や時間の長短など、どのような指導をしているか実態が見えず、出席扱いの判断をするのに悩むケースが増えている。家庭教師関係の企業、インターナショナルスクール等で、オンライン学習を行っている実例がある。保護者も子供のためになんとかしようとしているだけに、広く認めたいと思う。いろいろなケースに対応したガイドラインになると校長としてはありがたい。 |
| 小林委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・東京都はブレイブに通所できたら、指導要録上の出席扱いとしている。日曜のゲーム参加は、対象にしていらないが、出席は関係なく来所するケースが多い。子供たちは、関わりを求めていると思われる。 |
| 事務局 (所長) | <ul style="list-style-type: none"> ・民間のオンライン教材による学習について出席扱いを認めるかどうかというケースもある。 |
| 青木委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・多種多様になる。不登校の子供たちが、どこかに居場所として、行けるようになることは大切である。 ・オンラインで授業をライブ配信し、不登校児童生徒とつながっていても家で見ているかを確認することが難しい。 ・民間に行っていたら、個人的には出席にするかと思う。 |
| 波瀲委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校配信も参加できているかは、受け方が様々で判断が難しい。中学だと分からないから、やらないというところも多い。 |
| 村田委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・子供によっては、一斉授業よりも民間の個別オンラインドリルやチューバーの配信する5分の教材が分かりやすいこともある。学校の配信は積み重ねになるので、単発になると良いのではないか。しかし、これを出席扱いするのは難しいところだと思う。 |
| 小林委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・小金井では、ツイッターのマスチャンネルで数学の問題を取り組んでいる事例があった。小学生から大人まで夢中になれる問題をつくっている。メタバースは、その場にいることに意味がある。 ・メタバースの世界に入ったら、出席という小金井市の取組もある。しかし、保護者へのアプローチは困難である。 ・ブレイブは15分経たないと退所のタイムカードを押せないため、それ |

| | |
|-------|---|
| | <p>をひたすら待つ子がいた。それを繰り返す内に、その場を肌で感じ、集団につながった。滞在するだけでも、効果があるケースもある。</p> |
| 石井英委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・N高校については、コロナ禍でオンラインスクーリングだった。オンライン上での確認テスト、合言葉の入力、挙手ボタン、顔出しなど様々な方法で、出席を認める。出席扱いにするには認定制度が必要になるのかもしれない。 ・フリースクールは、学習を主にするのか、コミュニケーションを主にするのか。学習がいやでも集団は平気ということもある。 |
| 小林委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・関わったメタバースでは、感想を参加者にいってもらってはいるが、空間にいれば出席となる。出席にするかどうかには線を引くのは、非常に難しい。 |
| 青木委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・不登校の子が朝、登校してすぐ来る。→出席簿では、遅刻・早退。民間についても同様に細かく決めるのか。 |
| 石井太委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・布団の中から、オンライン上で参加している子と、寒い中来る子は同じ扱いでよいのか疑問。オンライン上では、板書は画面上で写しにくい。 |
| 遠藤委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・学習メインか、生徒とのつながりをメインとするか、生徒からはどちらの希望もあった。本校でもオンライン実施の際には、話題になった。教員が見届けないとすぐに停滞してしまう。 ・民間のオンラインについては、学校としては何も見えない状況。細かい確認をしないまま出席扱いにすることは疑問だ。 |
| 小林委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・21型スキル学習を監修しているが、これは6年間かけて学ぶプログラムで、対面でも、オンラインでもできる。 ・通常の学校でのオンラインは、かなり教材の工夫が必要で、求められる力量は相当なものになる。学校の教員が、対面の児童生徒と画面の中の児童生徒を両方意識した授業は非常に難しく、それに特化したトレーニングが必要である。 |
| 吉永委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・福祉的な居場所は学習することとなっている。民間施設の学習は、評価はないので、学校の教育課程にはなじまないと思う。違って当たり前なのだから、比較するものでもない。 ・高校は、単位制になるため、評価の在り方は様々である。 |

| | |
|---------------|--|
| 伊藤副委員長 | <p>(3) 令和5年度上尾市不登校対策推進委員会の流れの検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不登校生徒に常時対応できる職員はいない。なんとか全校で割り振って対応している。小学校はなおさら厳しいのではないか。 ・来年度の検討として、不登校の児童生徒が校内の学習室などで過ごせるように、不登校対応支援員がいるとよい。 |
| 小林委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・今年度、最後の委員会である。何かこの場で伝えておくべきことはあるか。 |
| 村田委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ意欲を次にどうつなげるかを一番考えないといけないと感じた。 |
| 遠藤委員 | <ul style="list-style-type: none"> ・先述だが、基本方針の市内周知の際には、意図を話す機会を設け、多くの教職員が納得できるように丁寧に進めてほしい。 |
| 事務局 (所長) | <ul style="list-style-type: none"> ・いかに共通理解を図るかを考えている。市として伝え方について、工夫・検討していく。 |
| 伊藤副委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・新しいことに取り組むことは、学校現場の負担となりやすい、その点も考えて運用してもらいたい。 |
| 小林委員長 | <ul style="list-style-type: none"> ・本日は、それぞれの視点から、御意見いただきまして、ありがとうございました。 |
| 事務局 司会 | <p>2 諸連絡 今後の流れについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上尾市不登校対策推進委員会委員の任期は2年間である。来年度も引き続きお願いしたい。 <p>○閉会のことば</p> |